

百年ぶりのパンデミック

大森 海太

昔から地球上では時々パンデミックが発生し、人口の減少を招いたりしている。十四世紀
末にヨーロッパを襲った黒死病（ペスト）では人口の三分の一が失われ、結果として農業労働力が減って領主層の力が低下し、中世封建制の崩壊につながったと言われる。近くは第一次大戦中に流行ったスペイン風邪があげられるが、あれから数えると今回のコロナはおよそ百年ぶりのパンデミックと言える。

人間の一生には様々なめぐりあわせがあるので、スペイン風邪のあとに生まれてコロナまでに亡くなり、生涯に一度もパンデミックに遭わなかった人はたくさん居る。いつぽうコロナに出合った現在の人々も、いまどの年ごろにあるかによってその受けとめ方はいろいろであろう。私の場合、たまたま後期高齢者になったばかりの時に遭遇したわけだが、もっと若い時だったらどうだったろうか、ヒマにまかせてこんなことを想像してみる。

もしいま二〇代か三〇代であったとしたら、根が軽はずみな私のこと「たいしたことないさ」などと意気がって大勢で歌舞伎町あたりに繰り出し、まつさきに感染したに違いない。

四〇代か五〇代だったら「仕事のためにはやむをえない」と勝手な言い訳をして、銀座のクラブに出かけたりして、これまたアウト。

六〇代なら「どうも最近の若いやつらには困ったものだ。ワシらは危ないところには行かない」と言いながら、裏通りの小料理屋でオカミサン相手に愚図愚図しているうちに、やっぱり発病。逆にもっと高齢で体力が弱っていたら、コロナの疑いありで自宅療養しているうちに容体急変でホックリ、てなことになっていたかも知れない。

なりたての後期高齢者でソコソコ元気に昼間はウォーキング、夜は飲み仲間たちが巣ごもりだし、カミサンの監視も厳しいので仕方なく家飲み。ペンクラブはオンラインをセツトしていただいたので、出かけなくてもOK。結果論だがこのトシでコロナにめぐりあったのは不幸中の幸いとも言っべきか。